

「生徒の気づきと学び」を最大化するプロジェクト オンライン対話のアーカイブ

1 はじめに

本プロジェクトは、全国各地の学校が新型コロナウイルスの影響によって休校せざるをえないなか、この間の「生徒の気づきと学び」を最大化することをめざして、有志により発足されました。

本プロジェクトには、これまでに全国 49 校(北海道・福島・茨城・東京・神奈川・静岡・長野・新潟・福井・奈良・京都・大阪・岡山・広島)から主に中学校・高等学校の教員が参画し、互いの知恵を持ち寄りながら「いかにして生徒の学びの質を高めるか」「学校再開後に実現したい新しい学校の姿とは何か」等のテーマで毎週オンラインでの対話を重ねてきました。このアーカイブは、これまでの7回の対話の知見をまとめたものです。

登校を再開する学校も多く、学校現場は新たなフェーズに向かっていきます。**本アーカイブは、Ver2.1 で新たに記載した「STEP5 分散登校の活用」に関して、重点的に追記しました。**

2.生徒の気づきと学びを最大化していくために

これまでの対話をふまえると、休校中の生徒の気づきと学びの最大化していくためには、以下の6つの要素が重要だと考えられます。また、これらは STEP1 から STEP6 までを順番に進めることでスムーズに進めやすくなると考えられます。

STEP1 休校中のマインドセットを教員間で共有する

STEP2 学校(学年・個人)としての学習支援の方針を定める

STEP3 活用するデジタルツール、ルール、教材等を決定し、準備する

STEP4 学習支援の方針を生徒・保護者に共有する

STEP5 学習支援を開始し、継続的に改善する

New 分散登校の活用「4.登校再開後の工夫」、「5.登校再開に向けた生徒の声」

STEP6 学校再開後に実現したい新しい学校の姿を検討する



本資料の活用にあたり、注意いただきたいこと。

- ・ 学校・クラス・生徒によって、適切な学習支援の方法は異なります。それぞれの学校の方針を定めただうえで、「どうすれば生徒一人ひとりの気づきと学びを高められるか?」「それは生徒・教員・家庭にとって持続的な方法か?」をご検討ください。
- ・ 紹介事例には遠隔で生徒の学習支援を行うための様々なデジタルツールが登場しますが、特定のツールの活用を推奨するものではありません。
- ・ 本アーカイブは、毎週のオンライン対話をもとに随時アップデートします。前回のバージョンに追記した項目は、**NEW**と記載しています。

本資料は、どなたでも自由にデータや印刷物を配布いただけます。お問い合わせは以下までお願いいたします。

生徒の気づきと学びを最大化する PJ 事務局 (nextlearning@mail.benesse.co.jp)

STEP1 休校中のマインドセットを教員間で共有する

- ポイント
- ・今は非常事態であり、教員・生徒・保護者の全員が不安を抱え、混乱している。
 - ・生徒の指導が目的ではなく、生徒が学習できるように支援することが目的である。
 - ・個別に様々な事情があり、その事情も見えにくいいため、教員・生徒ともに全員一律にこだわらない。
 - ・上記はあくまでも一例であり、継続的な対話を通じて教員一人ひとりの思いを共有する。

質問/コメント	実践例
<p>教員も生徒も不安です。</p>  <p>オンライン授業、接続どうやるんだろう。自分の姿も映るのかな。</p> <p>オンラインなんて分からない事だらけ！誰に聞いたらいいんだ。</p> <p>スマホも無いしパソコンもカメラなし…どうしよう。</p> <p>塾もやっていないし受験が心配だよ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教員生徒とも、以前とは前提が一切異なることを念頭に検討を進めた。 ・他校も民間企業でも手探りながら進んでいることを聞いて、安心した。 ・まずは学校内で信頼関係がなければ、非常事態に立ち向かえない。
<p>教員に在宅勤務経験がなく、不安が大きい。想像以上に負担も大きい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員が雑談する時間を毎日自由参加で設けるようにした。  <ul style="list-style-type: none"> ・公私の区別がつけられるようにコアタイムを定める。 ・ルールを柔軟に運用し、個々の事情に寄り添う。

<p>非常事態下で、どこまでが学校・先生の役割かが分からない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・まず校内で自分たちが取り組む学習支援の範囲を議論した。 ・学校だけではできないこと、生徒や保護者の協力が不可欠であることを伝えた。
-------------------------------------	---

STEP2 学校(学年・個人)としての学習支援の方針を定める

- ポイント
- ・「これまでの学校」をオンラインで再現することは難しい。一方でオンラインだからできることもある。
 - ・オンライン学習支援への期待値を上げすぎない。「何もないよりまし」の状態でもよしとする。
 - ・短期集中決戦だからできることではなく、長期戦をみすえた持続可能なプランにする。
 - ・学習支援の狙いを明確にする。「〇〇の単元を理解する」「生徒の表情を確認する」程度でもよい。
 - ・まずは教員-生徒、生徒-生徒のつながりが重要であり、つながりのうえに学びが成立すると考える。
 - ・オンラインで参画しにくい生徒には、代替手段を提供する。

質問/コメント	実践例
<p>どのような体制をつくるか？</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・一部の教員の努力に頼らない。学校内にチームをつくる。 ・なるべく多くの教員が参画し、協力しあう体制をつくる。 ・生徒や保護者も協力者とする。
<p>オンラインで参加しにくい生徒をどうするか？</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自治体は民間団体と連携し、端末や Wifi を貸与する。 ・公共放送やケーブルテレビのチャンネルを活用する。 ・ネットに拘らず、電話も活用する。
<p>どのような学習支援を行うか？</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「授業」「宿題」「HR」「面談」の内、「宿題」のみ提供している。 ・生徒の生活リズムを作るために「朝の HR」のみ実施している。
<p>時間割をどのように組むか？</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・午前はオンライン授業、午後は自習時間になっている。 ・生徒の集中力を踏まえ、オンライン授業は 35 分×3コマのみ実施。
<p>出欠管理をどのように行うか？</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・8:30からオンライン朝礼を行い、各担任が出欠状況を確認。 ・配信した課題の取り組み状況で、出欠確認を代替している。
<p>評価をどのように行うか？</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・評価は、取り組みながら追って検討する。 ・まずは一人ひとりの学習状況を把握するように心がけている。 ・配信した課題の取り組み状況を、評価に含める予定。 ・評価が学習のモチベーションになる生徒が多いので、取り組み状況を評価対象にすることにした。 ・各生徒の学習環境に違いがあり、公平な評価を担保できない。個別の学習状況を把握しつつ、休校中の評価はしない方向で検討中。
<p>職員会議をどうするか？</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学校での参加を必須とせず、オンラインでの参加を可能とする。

- ・入学直後の中1・高1は、特に信頼関係醸成に力点を置く方針にした。
- ・高3は自学自習できる生徒も多いので、原則 HR と面談、自習にした。

学年別にどう方針を変えたか？



学校の役割は何か？

- ・これまで生徒に過剰に与えてきたことを捉えなおす機会になる。
- ・学びを進められないのではなく、生徒が自分で時間の使い方を考え、自身の興味や関心を深める機会とする。

STEP3 活用するデジタルツール、ルール、教材等を決定し、準備する

- ポイント
- ・多数のデジタルツールを導入すると、生徒・教員の負担が大きい。必要最低限のものに絞り込む。
 - ・教員と生徒の役割に分かれて事前のロールプレイを行う。
 - ・教員だけでやろうとせず、必要に応じて生徒有志にも協力してもらう。(例:ツールの利用法)

質問/コメント	実践例
オンライン授業や会議にはどのような設備が必要か？	<ul style="list-style-type: none"> ・手持ちの PC やタブレットやスマホで構わない。イヤホンマイクを用意するとノイズが少なくなる。特に音質は映像以上に重要である。 ・ホストになる場合は Wifi ではなく有線接続のほうが安定する。 ・オンライン授業では、端末は 2 台用意したほうがよい。 1 台はカメラ・配信用、もう 1 台は手元のメモ用。
オンライン授業を行う際に、どのようなツールを活用するか？	<ul style="list-style-type: none"> ・オンライン会議システム(例:ZOOM)を活用している。 ・多くのツールで映像も使えるが、回線が重くなるので音声中心で行う。
録画した授業を配信する際に、どのようなツールを活用するか？	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の録画はスマホ。通常の黒板を前にして、動画を撮影している。 ・配信は学習プラットフォーム(例:Classi)。 スマホで撮影した動画を配信している。

宿題を配信する際に、 どのようなツールを活用するか？	<ul style="list-style-type: none"> ・コンテンツもセットで搭載されている 学習プラットフォーム(例:Classi)で配信している。 ・自身が作成した PDF ファイルを 学習プラットフォーム(例:Google Classroom)で配信している。
オンライン HR を行う際に、 どのようなツールを活用するか？	<ul style="list-style-type: none"> ・オンライン会議システム(例:ZOOM)を活用している。
デジタルツールが不得手な教員に どんなサポートをするか？	<ul style="list-style-type: none"> ・必要最低限のツールに絞り込み、使いこなすためのハードルを下げる。 ・一部の教員ではなく、全ての教員に学ぶ機会をつくる。
事前にうまく使えるかどうかを どのようにして確認するか？	<ul style="list-style-type: none"> ・職員打ち合わせを活用予定ツールを使って実施。 ・有志の生徒を募り、協力してもらう。

STEP4 学習支援の方針を生徒・保護者に共有する

- ポイント
- ・休校中に生徒に直接接するのは保護者。保護者の理解と協力がなければ上手くいかない。
 - ・家庭の端末やネットワークを利用する場合、保護者に書面で事前説明を行う。
 - ・出欠の扱い、評価の扱いは「検討中」の場合も含めて、事前に伝えておく。

質問/コメント	実践例
家庭への説明は どのように行ったか？	<ul style="list-style-type: none"> ・一時登校日のタイミングで、支援方針を書面配布及び口頭説明。 ・活用している ICT ツールの連絡機能を使い配信。
家庭からの理解が得られない際、 どのように対応したか？	<ul style="list-style-type: none"> ・緊急の休校対応のため、不参加も許容した。 ・当然の反応だと思うので、個別に電話面談を実施した。
生徒側の事前準備は どのように説明したか？	<ul style="list-style-type: none"> ・今後の学習支援に向けた「マニュアル」を作成した。 ・他校の HP にのっている「WEB 授業マニュアル」を参考にした。
保護者の協力を どのようにして得るか？	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の心のケアや学習法等の情報を保護者に提供する。 ・オンライン保護者会等で保護者とも対話する機会をつくる。

STEP5 学習支援を開始し、継続的に改善する

- ポイント
- ・これまでの時間割・授業を再現しようとするのは、生徒や教員にとって必ずしも最善ではない。
 - ・中1・高1は友達づくりや学校に慣れること、中3・高3は生徒一人ひとりにあった学習支援のように、生徒のニーズにあった取り組みを行う。
 - ・注目を集めているオンライン授業は、あくまでも手段の一つと捉える。様々な方法を組み合わせる。
 - ・生徒が自分で時間の使い方を考えられるようにする。過度にコントロールしようとしない。
 - ・教員-生徒の関係だけでなく、生徒どうしとの関係が豊かになるように心がける。
 - 教員がいなくてもコミュニケーションの豊かさが、生徒の気づきと学びを支える。
 - ・地域によっては長期間にわたって登校できない状態が続く、あるいは断続的にそのような状態になる可能性を考慮し、長期戦にそなえたマインドセット、持続可能なプランへと転換していく。

授業(同期型オンライン授業)

質問/コメント	実践例
<p>どのようにして授業をデザインするか?</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・通常の時間割、授業デザインはオンラインでは通用しないと考える。 ・1回の話題提供は10-15分程度、対話や演習の時間を多めにとる。 ・生徒も教員も対面に比べて疲労することを考慮する。  
<p>対面の授業と異なり、生徒の参加姿勢が良くない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・あまりこだわりすぎず、自由な姿勢で臨むことを許容する。 ・飲食可、途中休憩可、などを事前に伝えている。 
<p>想像していたほど、生徒がのってこない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・通常授業の倍以上、近況などアイスブレイクに時間をかける。 ・学年や内容によっては、録画授業のほうが良い。(ex.高3の受験準備、演習)
<p>参加できなかった生徒をどのようにケアするか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・オンライン授業を録画すると肖像権もあるので、別に撮影して配信する。 ・リアルタイムに参加できなくても、授業後に配信する確認テストに取り組みれば良いとする。 ・様々な事情がありうるので、公欠扱いにしている。参加回数は評価にいれないようにしている。 
<p>授業の出席確認が難しい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・チャット機能で自分の名前を投稿してもらい、後で確認。 ・出席にこだわらず、授業後に配信する宿題の取り組み状況で判断。 ・出席はとるが、生徒の様々な事情がありうるので、オンライン授業の欠席は公欠扱いにする。 
<p>オンラインで終日授業は生徒の体力が持たない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・午前中に3コマのみ、など、目的に対して最低限で行う。 ・通常授業を移管しようとせず、短い時間で数コマのみ実施。 

授業(非同期型の映像配信)

質問/コメント	実践例
通常授業の撮影だと、1本 50 分程度になってしまう。	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の集中力も鑑み、15 分程度のポイント解説のみにする。 反転学習型にし、基本は教科書の自学、それを補足する動画のみ配信。 
動画のファイルサイズが重くなってしまう。	<ul style="list-style-type: none"> 音声だけで配信する。 細切れの動画にして、必要などろだけ見れるようにする。 
全て録画しようとすると先生側の負担が大きい。	<ul style="list-style-type: none"> 補足説明したいところだけ、動画を作成する。 映像コンテンツは様々あるので、基本は既にあるものを活用する。 必要以上にクオリティを追求しない。間投詞等は許容する。 

宿題や連絡事項

質問/コメント	実践例
オンラインでの宿題は、どのくらいの量が適切か。	<ul style="list-style-type: none"> 少ないと思うくらいが丁度よかった。 各教科で事前の目線合わせを行い、分量調整は必ず行っている。
オンラインでの宿題は、どんな内容が適切か。	<ul style="list-style-type: none"> 教科書の自主学习を促すために、基礎事項に関する小テストを配信。 取組期間を長めに取った「自主探究」のような課題も出している。 教科の宿題を出しすぎず、この状況下だからこそ探究できることをレポート課題とした。
知識定着型の課題しか出せていない。	<ul style="list-style-type: none"> 「ドリルを止めるな」ではなく「学びを進める」だと教員間で繰り返し確認している。 各教科の内容にあわせて、コロナウイルスに関する探究的な課題を出している。 (例: ウイルスの記事を読んでコロナウイルスの特徴をまとめる、感染症の歴史を調べる)  <ul style="list-style-type: none"> 総合的な学習の時間で「学校再開後に、取り組みたいことは何か」「コロナウイルスが収束したら世界がどう変わるか」を考えている。

- ・まずは生徒の状況を継続的に把握できていることが重要。
- ・取り組み状況が悪くなってから声をかけると生徒は反発する。
- ・最初に簡単な課題を出して、生徒への信頼を伝えたり、励ます。
- ・様々な事情が想定されるので、取り組み状況を気にしすぎない。
- ・電話などで保護者に確認をする。必要に応じてオンラインでの保護者面談を提案する。

取組状況の良くない
生徒にどう関わるか。



オンライン HR

質問/コメント	実践例
時間帯を どのように決めるか。	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒にアンケートを取って決めた。 ・朝礼の時間は、これまでと変わらないようにした(08:30-)。
どんなコミュニケーション をとるか	<ul style="list-style-type: none"> ・Zoom朝礼を行い、毎日生徒が一人1分間で最近興味があること、ハマっていることを話す。朝からひと笑いして1日を始められるのでとても良い。 <ul style="list-style-type: none"> ・課題の提出状況や進捗をチェックするだけでなく、生徒とのコミュニケーションを重視する。 ・遊び(例:人狼ゲーム)を取り入れるなど、生徒が元気になるように心がけている。 ・生徒の自律性、有能感、関係性が高まるように、生徒への信頼を伝え、生徒ができたことを積極的に認め、生徒どうしで協力しあうことの大切さを伝える。 ・教員がいない、生徒だけのオンライン対話の時間を意図的に設けている。 ・生徒どうしの関係が豊かになることで、教員が知らないところで生徒同士が励ましあう、学びあうなど豊かな学習環境ができる。 ・「毎日を有意義にするために何をしているか」のアイデアを共有した。

継続的な改善

質問/コメント	実践例
ポジティブな出来事を 共有する。	<ul style="list-style-type: none"> ・教室よりも、ネットで個別にコメントを集めたほうが素直な声が集まる印象がある。 ・普段手をあげない生徒が発言したり、ノート提出よりもたくさん書く生徒もいる。 ・チャットを使うことで、今日の前の出来事に対して何を感じ、何を考えたかを率直に伝えられる生徒が増えた。発言や長文の記述という制約を取り払うことで、今まで聞くことができなかった生徒の声を聴くことができた。

学校再開時期が不透明で どのくらいの力加減で 行うべきか分からない。	<ul style="list-style-type: none"> ・見通しが立たないからこそ、始めに力を入れすぎないように教員間で確認している。 ・学習支援の目的、目標は持続的に実施可能なレベル感で設定し、都度見直している。
教員側も環境が変わり、 事前の想定ほど 取り組めていない。	<ul style="list-style-type: none"> ・事前の想定を無理にこなそうとするのではなく、柔軟に変更し、生徒に理解を求めた。 ・すべて自前で行う必要はない。民間企業のもの、他の先生が作ったものも使いながら取り組みを続けている。 ・同じ「教員」でも、地域や学校によって、同じ学校でも先生一人一人の仕事の様子が違う。進んでいる事例のようになれないと必要以上に気にしない。
オンラインで繋るので、 昼夜問わず連絡が来る。	<ul style="list-style-type: none"> ・質問や面談相談などは、原則 08:30-17:00 で回答するルールを追加した。 ・生徒だけでなく、保護者にもルールを告知して理解をもらった。

STEP5補足 分散登校を活用する **New** 項目4,5を追記

- ポイント
- ・分散登校をどう活用するかは、オフラインとオンラインが融合した新しい学校像を検討する第一歩。
 - ・「分散登校」「希望者登校」「分散登校しない」等、各学校にあった活用法を検討する。
 - ・授業数の確保や一律対応を目的とせず、生徒一人ひとりの学びを最大化するために柔軟に対応する。
 - ・健康面でハイリスクな生徒等、登校しにくい生徒がいることを想定しておく。

観点	対話内容
1. 分散登校時の マインドセット	<p>Q. 学校として、分散登校に何を求めるか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いつもの学校を再現することに拘らない。 対面は付加価値であり「貴重な登校日」と考える。 ・全員一律に拘りすぎると、本当に教員の支援が必要な生徒を十分にサポートできない。学習が進まなかった生徒や質問したい生徒のための自主登校日等、一人ひとりの学びを最大化するために柔軟に検討する。 ・教員に過度な負担を強いると、長く続けられない。 午前・午後に分けて登校し、授業を二回行う場合には授業時間を短くするなど工夫する。 ・課題を提出させるための登校にならないように注意する。 <p>Q. 方針を決める際に念頭に置くことは何か？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進学や就職を控えた最終学年の生徒等、重点的に支援すべき生徒を明らかにする。 ・まだ登校を望まない家庭があることを考慮し、公欠等の扱いを検討しておく。 ・どの学年にも健康面でハイリスクな生徒、ハイリスクな人と同居する生徒はいるが、学校や友人に伝えにくいこともある。登校しなくても学び続けられる仕組みを考える必要がある。 ・不安な生徒、保護者も存在するので、自校の考え方はなるべく早く発信する。 決定事項だけでなく「なぜ本校はそう考えたか」を明確に伝える。 ・学校休校時に得たオンライン活用の良い面は、積極的に残し、継続していく。



・文部科学省は「学校教育法施行規則に定める標準授業時数を踏まえて編成した教育課程の授業時数を下回ったことのみをもって、学校教育法施行規則に反するものとはされない」と発信している。形式的な対応ではなく、生徒の学びの機会を最大化することを考える。

2. 方針策定

Q.登校の仕組みをどのようにするか？(日程,時間割,登校規模,注意点)

- ・平日5日を AM/PM で分けて、10 個の登校タイミングを作って振り分ける。
- ・社会人の通勤時刻と重なり、人が集まっては意味がないので、「時差登校」も取り入れる。
- ・1クラス 40 人だと「密」になってしまうので、座席配置も考える必要がある。
そうすると、さらには教員の配置体制も検討が必要。

Q. 登校時の教育内容をどう考えていくか？

- ・学習保障と学力保証を分けて考える。これまでの学校と同じことを短い登校時間で実施しようとしても無理がある。中途半端な分散登校はせずに、オンラインでの学習支援に全力を尽くすことを考えている。
- ・対面だからこそできることを重視して、学級づくりや探究的な学びに取り組む。

学習のリズム作り、サポート

- ・これまで通り課題は課しつつ、理解が進んでいない生徒を登校時にケアをする。
- ・生徒にアンケートを取ったところ、民間ツールやオンライン HR、HP 上での課題伝達で教員側の想像よりもきちんと進んでいた。そこで、分散登校ではなく「希望者登校」にして、学習が進まなかった生徒や質問したい生徒が優先的に登校できる機会を作っている。
- ・これまでの課題ベースのオンライン授業では進度や理解度のばらつきがあるため、新しい時間割(いつ、どの教室に、どの教科の先生がいるか)を示し、自由登校はどうか。大学のオフィスアワー(教授への自由面会時間)のようなものである。
- ・生徒は休校期間中に自律的に学習する習慣を想像以上に身につけていることがわかった。中途半端な分散登校はやる必要がないと学内で議論している。

メンタル面のケア、モチベーション喚起

- ・登校前に、アンケートなども活用しながらケアが必要な生徒を探っておき、面談する。
- ・学校休止中に参加意欲が高くなかった生徒と丁寧にコミュニケーションする。

3. 取り組み内容の決定

生徒-生徒のつながり

- ・高1の生徒間のつながりがまだ醸成されていないので、レク的なものを多めに行う予定。
それにより、登校できない時間の学びがより安全安心で、豊かなものになると信じている。
- ・「密」に注意する必要があるが、学校でしかできないこと、加えて生徒同士の関係づくりに期待して実技教科を多めにする予定。

意識面の工夫

- ・教員が生徒に悩みを開示し、一緒に答えを作るように心がけている。
社会全体で前例のない事態に直面しており、先生が悩んでいることは生徒もわかっている。
だからこそ、一緒に答えを作る方が、生徒との繋がりも強固になっていくように思う。
- ・「休校中の指導の遅れ」ばかり気にせず、「休校中に生徒が学んだこと」を見ている。
- ・「本当に登校してまでやることか？」を教員同士で問うようにしている。
休校中に、生徒や保護者の見方がかなり変わったと感じている。
- ・課題が与えられない、自由な時間があることで、何かに没頭できる生徒もいるとわかった。
休校中に自分なりの工夫をして学習し、大きく成長した子もいたから気づけた。
- ・授業だけでなく、部活や行事も「何のために実施していたのか？」を問い、再検討している。

取り組みの工夫

- ・取り組みを振り返る時間を丁寧にとっている。
休校中の取組状況が不安な生徒もいるから、ポジティブなフィードバックをしてあげたい。
- ・休校中のオンライン活用に関して、今後も続けたいことの洗い出しを教員間でスタートした。
オンラインには協働学習での即時性や可視性という強みがあると感じている。
- ・先生側が取り組みを棚卸するチャンスとして、
休校中や分散登校中の工夫をシェアし、良いところはチームでシェアするようにした。
- ・生徒に課す宿題に関して、教科感の連携/調整に取り組もうとしている。
背景は、一人の生徒が中心になって、「提言書」をまとめて教員に提出してくれたこと。
「休校中の全教科合計の宿題が多すぎて、自分なりの課題に取り組む時間がない」
「先生側が、教科を超えてもっと連携して検討してくれないか」という意見があった。

その他

- ・アンケートを定期的にとるようにしている。
生徒には「学校に通いたいか?」、保護者に「学校に通わせたいか?」。
当然様々な意見があるので、学校側の一方的な決定にならないよう、注意している。
- ・この機会に、授業や部活、委員会などの形式的な学校の価値ではなく、
暗黙的な学校の価値(友達との繋がり、コミュニティとしての価値など)を言語化したい。

登校について

- ・分散登校が始まりますが、「普通に授業をするならオンラインでいいじゃん」と思います。
- ・1時間かけて学校行ったのに、先生や友達に会えるのにほとんど話さず、
授業を聞くだけなのはどうなのかな、と思います。
- ・分散登校で、少人数で登校して課題を出したり、授業だけして帰る学校があると聞きます。
わざわざ学校に行くのにすごくもったいないし、先生も生徒も悲しくないのかと思います。
- ・学校に行ってコミュニケーションをとることが、生徒にも先生にも貴重な場であることを、
休校中に家にいて感じました。
- ・今「話す」ということの需要はめっちゃ高くて、みんな話し足りないと思います。
だから登校しても、1時間2時間で終わっちゃうのは残念に感じます。

New

4. 登校再開後の工夫

New

5. 登校再開に向けた 生徒の声

授業について

- ・オンライン授業を受けてみて感じたことは、
授業がずっとインプットで、先生の話ばかりが続くと、聞いている身としては疲れること。
オンラインだったからかもしれないが、これまであまり意識していなかったことに気づいた。
- ・「先生が教えたい/伝えたいことを、生徒がちゃんと理解する」ことで、
先生と生徒の関係性が成り立つと思います。
- ・40分ずっと先生が喋っている授業は、
生徒に意味がないわけではないと思うけど、情報量が多すぎます。
クラスメイトと喋ったり、アウトプットがしたほうが、有意義な学びになると思います。
- ・いろんな教科を授業で学んでいるけど、
やっぱり教科はいくらでも自学自習が出来るし、自分ですでにしているつもり。
そうしたら「学校に行く意味とはなんだろう？」とどうしても考えてしまう。
- ・オンライン授業だと、どうしてもずっと生徒が聞くことが多いですが、
生徒が何か言いたくなる授業、興味の湧く授業というのが大事だと思います。
どれだけ生徒が自主的に声を出して、クラスの前で何かを発言する場を作るのが、
これからの授業のあり方ではないかと思います。
- ・これからは、生徒がどう思っているかを尊重した上で授業することが大事だと思います。

その他

- ・生徒は学校の価値は授業だけだと思っていない。そのことを強調したい。
- ・自分も含めてあらゆる生徒の様子を見ている先生にしかできないことがあると思います。
- ・この長い休みの中での気づきは、人と話さないと自分自身の気持ちにも気付けないこと。
共働きで両親とも話す時間が限られる中、悩んでいたことを親身になって
聞いてくださった先生の存在で、自分自身の気持ちも整理できた。何よりありがたかった。

※生徒の声は、岡山大学が主催する全国の高校生とのオンライン対話「SDGs ユース」の協力により、まとめたものです。

STEP5補足 1学期の学習を評価する

- ポイント
- ・これを機会に学校の評価の考え方を再検討し、よりよい評価のあり方を考える。
 - ・評価するだけでなく、生徒へのフィードバックを丁寧に行う。
 - ・生徒の学びの成果を可視化する評価と、生徒を選抜するための評価を分けて考える。
 - ・評価(Assessment)と評定(Evaluation)を混同しない。入試情報は随時確認する。

観点	対話内容
評価の検討状況	定期考査 <ul style="list-style-type: none">・夏休みの短縮化の検討と併せて検討した。中間考査は後ろ倒しで実施予定。・中間考査は見送り、1学期は期末考査のみ実施する。・オンラインで中間考査は行う。自宅受験だとカンニングを気にする声もあったが、「持ち込み可の試験」という位置づけで問題を作成している。

	<p>定期考査以外の評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・休校中の自宅学習内容をポートフォリオに記入し、ルーブリックで評価をつけることを検討。 ・休校中の自主的な学びに対して「校長賞」を設け、与えられた課題に取り組むだけでなく自ら課題を見つけ、努力した生徒の取り組みを生徒全員に伝える。 <p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒/保護者とも、休校中に提示されている学習内容の扱いは気になっている。評価の方針は、生徒と保護者に判断理由も含めて丁寧に説明する必要がある。 ・自ら研究したいテーマを見つけ、全力で取り組んだ生徒が少なからずいる。成績の付け方で生徒が4月の努力が無駄だったと思わないようにしたい。 ・学習評価はフィードバックと切り離して考えることはできない。単に成績を付けるのではなく、生徒ひとりひとりの学習の状況を把握したうえで、適切なフィードバックを行いたい。
悩み	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒間で学習環境が異なるため公平な評価は不可能である。また、1学期については後付けの評価にならざるを得ない。1学期は進級できるかどうかの評価はするが段階別の評価はしない予定である。この時間を作って新しい評価方法を策定し、2学期から運用することを保護者に説明する。 ・「1学期の成績は公平につけられている」という根拠が乏しく、苦しい。 ・このような状況下で、大学がどのように評定を入試に活用するかが見えてこない。

STEP6 学校再開後に実現したい新しい学校の姿を検討する

- ポイント
- ・学校休止中の様々な取り組みや経験をふまえて、どういう学校や授業であるべきかではなく、生徒の気づきと学びを支えるためには何かどうあるべきかを考える。
 - ・「オンラインでもできること」「オンラインだからできること」「オンラインではできないこと」を区別して、オフラインとオンラインが融合したハイブリッド型の学校像を考える。
 - ・学校が生徒の学習を支える以外にも、様々な機能を担っていることを肯定的に捉える。

教員の声

項目	事例
学校の役割	<ul style="list-style-type: none"> ・オンラインデフォルトの学校像を考えている。 ・案外生徒が学校へ期待するところが大きいとわかった。しかし、それは出会いの場としての機能であって、授業ではない。実は、これまでも授業は単なるメディアであり、そのメディアを通じて対話することに生徒が意味を見出していたのではないか。
先生役	<ul style="list-style-type: none"> ・ティーチングではなく、コーチングやファシリテーションがより重要になると実感している。 ・教員が生徒に何をやるかではなく、教員がいなくても生徒がどれだけ学べるかを考える。 ・生徒を信頼することの重要性を感じた。 ・生徒の学習だけではなく、ウェルビーイングのために何ができるかを考える。 ・教員自身がワクワクしていないと、生徒もワクワクしない。 ・もちろん教員は教えるのだが、それ以外のことも生徒は沢山学んでいる。「教員が教えたことを生徒が学ぶ」ではなく、「生徒の学び全てを応援したい」と思う。

授業	<ul style="list-style-type: none"> ・授業をするのではなく、教科を学べる面白さを伝えられるか、身に付くかどうかポイント。 ・探究的な学びがより重要になる。 ・コロナがあったから授業を変えられた。学校が再開しても元に戻りたくない。 ・履修を取り戻すのではなく、学びを進めたい。生徒は、4月に大きく成長した。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・学校単位で何かをするだけでなく、学校どうして連携したり、地域の協力者を集めてエコシステムをつくるのが重要になる。学校を閉じた場所にしない。 ・休校中に自ら問題意識を持って学んだり、計画的に自学した生徒が予想以上に多かった。生徒に与えすぎないことが重要だと思った。

生徒の声

項目	事例
学校の役割	<ul style="list-style-type: none"> ・学校にいかなくなって、学校に行く意味が何かを考えている。 <ul style="list-style-type: none"> ・学校は「親以外の人と出会う場」だったと気づいた。学校は勉強する場だけではなくて、色々な人と何かする機会を与えてくれる場だった。 ・学校を今までは嫌っていたが、今となっては交友の場であり日々の成長の場であった。改めて学校に通いたいと思うようになった。
先生の役割	<ul style="list-style-type: none"> ・学習状況を提出後、生徒からもらった3行のメッセージがとても嬉しかった。 ・普段と違う社会の状況、普段と違う学び方が広がっている中で、普段通りの規律守ることに意義はあるのか疑問に感じる。生活リズムを整えないと、だとか教師として生徒の健康を把握しなければ、というような意見は一理あると思うが、自分に合う生活リズム、学び方を見つけるために創意工夫を重ねる時間の方が重要なのではないかと個人的には思う。 ・教員を増やしていくことだけでは成功しないと思う。楽しく教えられていない先生が多い。 ・学校以外のコミュニティと関わっている先生の方が生徒に対して何かためになることを発信してくれるので、先生方はもっと外部の人たちと繋がった方がいい。
授業	<ul style="list-style-type: none"> ・日本では先生が授業することがオンライン授業と呼ばれていて驚いた。ニュージーランドでは先生が課題を出すことも含めて、全てをオンライン授業と呼んでいる。 ・カナダはオンラインでも文献や映像を見てからディスカッションすることが多く、先生のレクチャーは少ない。 ・オンライン授業ではチャットで意見が言えて楽しかった。 ・単に勉強をするだけならば、学校にいかなくてもできることが沢山あるとわかった。授業がなければ学べないわけではなく、授業は勉強する方法の一つだとわかった。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・学校休止中なのに先生が出勤していることに驚いた。 ・授業準備や事務連絡等、先生たちがいつもよりも忙しいことを知った。

- ・生徒の中には、発言はほとんどしないが、発言している子たちの話を横から聞いて、成長していくタイプの子もいるのではないか。オンラインでは発言することが前提になっているように感じる。
- ・ゆとり世代のように「コロナ世代＝勉強できない世代」と言われるのが嫌と思っていたが、むしろ4月に自分のやりたいことを見つけて挑戦している高校生が沢山いた。「コロナ世代＝異才を発揮する世代」になると思った。

※生徒の声は、岡山大学が主催する全国の高校生とのオンライン対話「SDGs ユース」の協力により、まとめたものです。

3. その他、よくある質問

Q.休校時の学習支援に関する、文部科学省の方針はどうなっているか？

A.文部科学省による以下の発信をご覧ください。

4月10日

新型コロナウイルス感染症対策のための

臨時休業等に伴い学校に登校できない児童生徒の学習指導について(通知)

<https://bit.ly/3a8hXVh>

4月17日改訂版

Ⅱ. 新型コロナウイルス感染症に対応した臨時休業の実施に関するガイドライン

<https://bit.ly/357rURS>

4月21日

新型コロナウイルス感染症対策のために小学校、中学校、高等学校等において

臨時休業を行う場合の学習の保障等について(通知)

<https://bit.ly/2Y6x1Ak>

4月23日時点

新型コロナウイルス感染症に対応した小学校、中学校、高等学校及び

特別支援学校等における教育活動の再開等に関するQ&Aの送付について

<https://bit.ly/2VHljul>

5月15日

新型コロナウイルスによる緊急事態宣言を受けた

家庭での学習や校務継続のためのICTの積極的活用について

<https://bit.ly/2WCNStg>

新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえた

学校教育活動等の実施における「学びの保障」の方向性等について(通知)

<https://bit.ly/3bMKKzC>

Q.オンラインでの学習支援における著作権の扱いはどうなっているのか？

A.以下をご覧ください。

4月10日

遠隔授業で教科書利用可能に 改正著作権法、28日施行

<https://s.nikkei.com/2V6Ogj2>

令和2年 4月23日時

教育の情報化に対応した著作権法改正…文化庁が解説

<https://resemom.jp/article/2020/04/23/55981.html>

Q.オンライン指導における評価の扱いはどうなっているのか？

A. 文部科学省による以下の発信をご覧ください。

「家庭学習も評価対象に」 休校中の学習指導で文科省通知

<https://s.nikkei.com/34y2AUQ>

生徒の気づきと学びを最大化するPJメンバー（敬称略・一部を抜粋して紹介）

市立札幌藻岩高等学校 佐々木佑季、調布市立多摩川小学校指導教諭 庄子寛之、神奈川県立西湘高等学校教諭 木村剛、さいたま市立大宮国際学園 松田祐輝、長野県軽井沢高校校長 下井一志、長野県蘇南高校校長 小川幸司、福井県立若狭高等学校 渡邊久暢、福島県立ふたば未来学園副校長 南郷市兵、奈良女子大学附属中等教育学校 二田貴広、公立高等学校教諭 高橋就、公立中学校教諭 木下慶之、函館工業高等専門学校教授 下郡啓夫、青山学院高等部 情報科主任 植田晶子・ICT教育推進委員長 佐藤健悟、上野学園中学校・高等学校研究開発部長 藤井亮太郎、英数学館中・高校副校長／岡山理科大学附属高校副教頭 土屋俊之、神奈川学園中学・高等学校 中野真依・田村純也、関西学院千里国際中高等部 米田謙三、実践学園中学・高等学校入試広報教頭部長 倉田誠治、自修館中等教育学校進路情報室長 川澄勤、聖徳学園中学・高等学校グローバル教育部長 山名和樹、聖徳大学附属女子中学高校 黒沼靖史、湘南学園中学校高等学校 小林勇輔、湘南学院高等学校 行方昭二、聖和学院中学校・高等学校 栢本さゆり、田園調布雙葉学園 小林潤一郎、東京女子学園中学校高等学校広報部長 立原寿亮、東洋英和女学院中高部 長船圭宏、広尾学園中学校・高等学校医進・サイエンスコース統括長 木村健太、三田国際学園中学校・高等学校 大野智久、立命館宇治高等学校 稲垣桃子、国立大学附属学校教諭 平田知之、私立学校教諭 杉山比呂之、私立学校教諭 増田瑞綺、CAP 高等学院(鹿島学園山北高校通信制・サポート校)代表 佐藤裕幸、教育ジャーナリスト後藤健夫、合同会社楽しい学校コンサルタント Second 代表 前田健志 ベネッセ教育総合研究所 次世代の学び研究室 主席研究員 小村俊平(代表・文責)

お問い合わせは以下までお願いいたします。ご連絡いただければ、ワードファイルのお渡しもできます。

生徒の気づきと学びを最大化するPJ事務局（nextlearning@mail.benesse.co.jp）